



TITLE:

マリーンズの外国為替論(2)

AUTHOR(S):

本山, 美彦

CITATION:

本山, 美彦. マリーンズの外国為替論(2). 経済論叢 1992, 149(1-2-3): 21-38

ISSUE DATE:

1992-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/44816>

RIGHT:

經濟論叢

第149卷 第1・2・3号

哀 辞

故 山岡亮一名誉教授遺影および略歴

いわゆる「コンツェルン」考	下 谷 政 弘	1
G・マリーノズの外国為替論 (2)	本 山 美 彦	21
マレーシアの原木資源と輸出代替化戦略の問題点	中 島 健 二	40
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合併企業の位置づけ (3)	石 川 康 宏	67
短期調整過程の二類型 (2)	森 岡 真 史	79
利益処分会計と剰余金処分会計	藤 井 深	97
多属性効用分析の集団意志決定への拡張	朴 時 炫	113
ケインズ・利潤・貨幣	服 部 茂 幸	140
外部効果と保護政策下の国民経済の形成	松 尾 昌 宏	155
1930年代朝鮮における総督府の農村統制	朴 ソ ブ	171

追 憶 文

山岡亮一先生を偲ぶ	関 順 也	189
山岡亮一先生を偲んで	中 野 一 新	193

平成4年1・2・3月

京都大學經濟學會

マリーンの外国為替論（2）

本 山 美 彦

V 貸し付け偽装手形

16世紀末のスコラ学者，T. ウィルソン（Thomas Wilson）は，為替手形（exchange by bills... *cambium per litteras*）を3種類に区分した。1つは真正手形（real exchange... *cambium reale*）であり，貨幣が現実に変換されるものである。2つは乾燥手形（dry exchange... *cambium siccum*）であり，利子を取る貸し付けを偽装したものである。3つは架空手形（fictitious exchange... *cambium fictum*）であり，乾燥手形に似ているが，金利が人為的に操作されたものである（Wilson, *Discourse*, pp. 302-309）。後の2つの為替手形には，徴利禁止法を潜りぬける手段が隠されているのではないか，というのが当時のスコラ学者が抱く一般的な疑惑であった。この点は，グレシャムの覚書きにおいても確認される。グレシャムは，真正手形を自然手形（natural exchange）と呼び，貸し付けを偽装する手形を商人手形（merchants' exchange）と名づけた。その価値以上の別の貨幣を他の場所で得ることを期待して，ある場所で貨幣を引き渡す商人によって発行されるのが，この商人手形である，と彼は決めた（de Roover, *Gresham*, p. 96）。

16・17世紀の典型的な為替手形の仕組みは，ド・ルーヴェーの説明によれば以下の通りになる（de Roover, *ibid.*, pp. 99-100）。アントワープにフレミッシュ貨のバランスをもっているロンドンの商人が，そのバランスをロンドンで営業する外国銀行にスターリング対価で売ろうとするとき，その取引は，アントワープ宛て，フレミッシュ貨建て，フレミッシュ貨払い手形を，ロンドンの外国銀行に売却するという形を取る。この場合，手形を売るロンドンの商

人は為替手形の「振り出し人」(drawer)であり、スターリング貨を得る意味で「貨幣獲得人」(taker)である。このロンドン商人の手形を購入する外国銀行は、手形を対価にスターリング貨を提供するので「貨幣引き渡し人」(deliverer)となる。この銀行は、アントワープにフレミッシュ貨を送金する必要があるため、この手形を購入したのであるから、同時に「送金人」(remitter)でもある。この手形は、外国銀行のアントワープにおける代理人に送付される。銀行の代理人は、手形に貨幣受領者であることが明示され、ユーザンス後に、同じくロンドン商人のアントワープにおける代理人からフレミッシュ貨を入手するので、「受け取り人」(payee)となる。ロンドン商人のアントワープにおける代理人は、ロンドン商人によって、外国銀行のアントワープにおける代理人にフレミッシュ貨を支払うように、ロンドン商人から指示されるところから、為替手形の「名宛人」(drawee)となり、それは、フレミッシュ貨の「支払い人」(payer)でもある。つまり、16・17世紀のロンドン・アントワープ間の為替手形とは、外国で、外国通貨による支払いを約束した支払い指図証書の1種だったのである。

ド・ルーヴァーは、つぎのような為替手形を例証として挙げている。それは、イタリア商人が振り出した手形である。

A di 14 Marzo 1611

In Londra per £69. 15. 7 a 33.9

A messo Uso pagate per questa prima di Cambio a Francesco Rois Serra lire sessanta nove soldi quindicie et denari sette sterlini a soldi trenta tre et denari nove di grossi per £[di]sterlini, Valuta dal maestro Francesco Pinto de Britto et ponete a nostro Conto, a Dio.

Giovanni Calandrinie Filippo Burlamachi

Acetatta.....

[裏面] A Baltasar Andrea

Prima In Anversa

117. 15. 0

上記のものを邦訳しておく。

1611年3月14日付

ロンドンにて £69. 15. 7. レート 33.9

この第1の為替手形は、在イングランドのフランチェスコ・ピント氏から受け取った額、£69. 15s. 7d. st. を、£1. st. 当たり 33s. 9d. gr. で、半月のユーザンスでフランチェスコ・ロイス・セラ氏に支払うことを示す。その支払いは我々の勘定につけておいていただきたい。

あなたに神のお加護を。

ジオバンニ・カランドリーニとフィリッポ・ブルラマチ

引き受け人………

〔裏面〕 バルサザール・アンドレアへ。

第1 アントワープ

117. 15. 0

ここで、「貨幣獲得人」(taker)と手形「振り出し人」(drawer)は、ロンドンで営業しているマーチャント・バンカーのジオバンニ・カランドリーニとフィリッポ・ブルラマチ、「支払い人」(payer)は、アントワープのバルサザール・アンドレア、「貨幣引き渡し人」(deliverer)は、ロンドンのフランチェスコ・ピント、「受け取り人」(payee)は、アントワープのフランチェスコ・ロイス・セラ、である。ロンドンで融資を受けたスターリング貨、£69. 15s. 7d. st. は、15日間のユーザンス (*messo uso*) の後、£1st. 当たり £33. 9d. gr. の交換比率に基づいて、アントワープでフレミッシュ貨で支払われる。その額は、£117. 15s. gr. に相当する⁹⁾。

9) この手形の振り出し人であるジョヴァンニ・カランドリーニとフィリッポ・ブルラマチは、ロンドンに在住する有力なイタリア人マーチャント・バンカーであった (Judges, 1926, pp. 285-300; *Encyclopaedia of the Social Sciences*, III, 1935, p. 75)。彼らは、義理の親子であり、ブルラマチは、プロテスタントに改宗したために、ローマ教皇からルッカ (Lucca) を追われた (1550年頃) 貿易商人の一族の子孫である。彼は、当時プロテスタントの町であったセダン (Sedan) に生まれ、1605年に義父とともにロンドンで銀行を設立した。彼はまた、1613年から1633年までイングランド王室の金融上の代理人をも務めるほどの大物であった。ただし、彼は王室に貸し込みすぎて破産し、1644年に死去している。支払い人のバルサザール・アンドレアは、スペイン系のアントワープ商人であった。1611年時点ではブルラマチのアントワープ代理人であったが、1622年に破産している。

他の2人については、スペイン人かポルトガル人かであろうと推察されるが、その他のことはなにも分かっていない (de Roover, *Gresham*, p. 125)。

この手形は、スターリングで建て値されている。当時のロンドン・アントワープ間の為替手形は、どちらの地で振り出されたものであっても、スターリング建てであった。「我々の勘定」(*nostro conto*)という用語は、「あなたの勘定」(*vostro conto*)に対立するもので、この場合、バルサザール・アンドレアがブルラマチの代理人であることを示している。

16世紀の為替手形は、したがって、通常の意味における為替の貸し付けが加味されたものであると考えられる。この2つの機能が分離するのは、市民革命後のロンドンの金匠 (*goldsmith*) たちが、内国手形の割り引きをするようになってからである。しかし、16・17世紀段階では、手形と言えば外国為替手形のことであった。

今日では、手形を振り出して、それを買ってもらう人は、額面から一定比率を割り引きされる。この比率はつねに年率で換算される。しかし、16・17世紀の為替手形は割り引きされずに、そのときどきの為替レートで売買されていた。手形を購入した人は外国でのバランスを得る権利を獲得したことになるが、外国貨幣を国内貨幣に転換できないかぎり、利益の確定はできなかった。獲得した外国のバランスを国内貨幣に転化する方法は、外国の正貨を現送するか、商品を輸入するか、再度、外国で逆の為替手形を買うかによらねばならなかった。このうち、為替手形による方法がもっとも安全だったので、この方法がもっとも多く使用されたのであるが、そのさい、利益が上がるか、損失が出るかは、この再為替手形の価格いかんによる。この価格自体が市場に依存するのだから、16・17世紀の銀行業務とは投機そのものであった、と見なしてよい。つまり、利益はつねに不安定なものだったのである。利子 (*usury*) を取ることが禁止されていた中世において、為替業務の利益自体が確定できないという事実が、多くの教会法学者によってこの業務を正当なものと認定させたのである。もし、為替手形が割り引かれるようなことがあれば、それは直接貸し付けで利子を取るのと同じく、利益が前もって確定されることになるので、それは徴利となり、違法と認定されたのである (Tawney, introduction to Wilson's *Discourse*)。

しかし、ウィルソンは、スコラ学者よりも徹底していて、為替業務そのものも利子取得行為であると非難した。銀行が損をする確率は100に1つもないからである、というのがその理由であった (Wilson, *Discourse*, p. 306)。

IV 大陸の銀行家への反感

これらの大陸の銀行家が為替を自在に操つるようになったのは、マリーンズによれば、ヘンリーVII世の時代であり (Malynes, "Treatise of Tripartite Exchange", Huntington Library MS., EL pp. 16-19, 37), ミルズによれば、ローマ教皇がその害悪を生み出した元凶である (Miles, *The Customer's Reply*, pp. 11-12)。13世紀の半ばにイングランドに進出したイタリアの銀行家が、ローマ教皇に聖職者就任後初年度の収入 (annates), いわゆるペテロの献金 (Peter's pence) やその他の収入の送金を委託されていた。このような商人が利用できる為替業務は、14世紀半ばにはかなり整備されていた。銀行家のほとんどはイタリア商人であり、彼らは、ブルージュ、パリ、ロンドン、等、西ヨーロッパの金融センターに支店網を拡大していた。イングランドの商人がこのような金融センターに接近できるようになったのは、ようやく、エドワードIV世、ヘンリーVII世の時代になってからである。16世紀に入っても、イタリアの銀行家は、なおロンドンで支配的な地位を保っていた。著名な銀行家として、ボネデット・スピノラ (Benedetto Spinola), ホラティオ・パラヴィキノ (Horatio Pallavicino) がいた。2人ともジェノア人で、後者は、メリー女王の時代にローマ教皇の銀行家としてロンドンにやってきたが、エリザベス女王の時代にプロテスタントに改宗した人である。しかし、16世紀になると、ウィリアム・レーン (William Lane) とか、リチャード・グresham (Richard Gresham) (トーマス・グreshamの父), といったイングランドの銀行家も登場するようになった (de Roover, *op. cit.*, p. 10)。このような、イングランドを本拠とする銀行家が増えることによって、イングランドの個別的利益を主張し、外国の大銀行家の不正な蓄財を攻撃するという土壌が形成されることにな

る。上記のミルズや、アームストロング (Armstrong, "Treatise...", p. 32) がその代表的な論客であった¹⁰⁾。

17世紀以前の為替手形は、今日の言葉でいうファイナス手形であり、なにか具体的な商品に対して振り出されるといった類いのものでなく (Tawney, Introduction to Wilson, p. 73), 単に、外国のバランスを調整するためにのみ、銀行家相互で振り出されるものであった。1410年に死去したイタリアのフランチェスコ・ダティニ (Francesco Datini) とか、メディチ家 (the Medici) などがその典型である。たとえば、ブルージュにおけるダティニの代理人であったオルランディニ家 (the Orlandini) は、当時、バルセロナにクレジット・バランスをもっていて、フローレンスに送金する必要があったとき、フローレンスでバルセロナ宛ての手形を発行した。フローレンスでは、バルセロナに送金する必要のある商人が多数いたからである (de Roover, *op. cit.*, p. 105)。

為替への反感は、大衆の反感でもあったが、経済メカニズムに対する無知も一役買っていたことも確かである (*ibid.*, p. 106)。しかし、メカニズムを熟知していた論者ですら、同様に為替に対する憎悪を顕わにしていたのが、16・17世紀のイングランドの状況であった。それにしても、為替手形に対する反感は、イングランドでとくに強かったという背景にはなにがあるのだろうか。イタリアの銀行へのイングランド人の反感は伝統的なものであった。大衆はもとより、政府に近い立場にいる人ほど、その反感は強かった。説明のつかない正貨流出

10) ド・ルーヴェーは、イングランドでは金匠が銀行業務の嚆矢であるとする通説に反対する (de Roover, *Gresham*, p. 102)。ド・ルーヴェーが通説として上げている論者はロイド・ミント (Mints, L. W., *A History of Banking Theory in Great Britain and the United States*, Chicago, 1949, p. 13) とフェヴァイェアー (Feavearyear, *The Pound Sterling*, pp. 91-95; 邦訳, 121-34ページ) である。市民革命直前の時期に、金匠が預金振り替え業務、発券業務、内国手形割り引き、等々の新しい種類の銀行業務を導入したことは確かである。しかし、銀行業務の主たる内容を為替手形取り引きに置くならば、イングランドでは、市民革命よりも数世紀も前に発生していたことになる。少なくとも、エリザベス時代において、銀行家とは為替取り扱い業者と同義だったのである (Richard, 1929, p. 2)。重商主義者にとっての銀行とはそのような意味であった。

が中世以来ずっと継続していたことへの恐怖感からきているのだろうが、正貨流出がアントワープの銀行家の陰謀であるという感情は、16・17世紀イングランドの国民的感情だったのである¹¹⁾。

エドワードIV世の時代に入ると、羊毛に代わって毛織布が主力工業になりつつあり、その主要市場である低地諸国の貨幣状況が、イングランドの毛織物の消費を大きく左右するようになっていた。また、国内生産価格の調整が困難であったことから、輸出が伸びるか否かは、イングランドの為替の動向に左右されていた。加えて、利子取得の禁止体制を潜り抜けるために生み出された為替手形を振り出すことによって、短期の資金調達を行なうということが一般的であった状況下では、資金調達の必要性が高まれば高まるほど、為替への関心もそれだけ大きくなったのも当然だろう。

16世紀のイングランドでは、輸出業務のほとんどはイングランドの貿易商人に担われていたが、輸入業務についてはイタリア人、スペイン人、フランドル人の掌中にあった。イングランドの貿易商人は、ブラックウェル・ホール

11) この種の為替手形と外国為替銀行に対する態度において、大陸とイングランドでは、大きな違いがあった。大陸においては、為替手形は、正貨輸送を節約しつつ貿易を促進させるものとして、好意的な受け入れ方をしていた。当時の治安状態で正貨を輸送することは、それが陸路であれ海路であれ、大きな危険を伴うものだったからである。大陸のスコラ学者たちは、為替取り組みが需給を正確に反映するかぎり、為替手形の価格は公正価格であると考えていたし、為替による事実上の利子も、為替自体が不安定なものであることを理由に利子とは見なされなかった。為替手形の価格は天候のように常時変化するものであり、天候を支配することができないように、為替価格を支配することなど不可能であり、この危険性をももながらも為替業務を営む銀行家は、ユダヤ人のような忌まわしい金貸し業として非難されるべきではなく、賞賛されるべきである、とすら論じられていた (de Roover, *Gresham*, pp. 175-77)。

しかし、イタリアやフランドル地方よりも経済的に遅れていたイングランドにおいては、事情は異なっていた。為替は、つねにイングランドを滅ぼそうとする外国の銀行家の陰謀によって操作されていて、イングランドから正貨を奪う手段になっている、というのがこの地の一般的認識だった。ド・ルーヴァーは、イングランドの為替への反感には4つの理由があるという (*ibid.*, pp. 179-80)。1つは、イングランドでは、重金主義の伝統が中世以来なお強かったこと、2つは、為替業務のほとんどがもともとイングランド人が反感を抱いていた外国人の手に握られていたこと、3つは、そもそも為替問題についての正確な知識をほとんどのイングランド人がもっていなかったこと、4つは、イングランドの政府がなお保守的な地主層によって支配されていたこと、がその理由である。このような事情は、政府自体が商人によって占められていたイタリアとか、国家の繁栄を外国商人の自由な活動に委ねるフランドル地方の状況とは対称的なものであった。

(Blackwell Hall) の取引所を介して毛織物生産者に資金を提供する。この資金は通常、ロンバード・ストリート (Lombard Street) で、上記の説明にあるような為替手形を振り出すことによって調達されたものである。手形は、冒険商人の海外代理人宛てに振り出され、アントワープでの毛織物販売代金で手形の約束を履行する。為替に支払った後の残金は、アントワープでロンドン宛てに為替手形を振り出すことによってロンドンへ送金される。このように、イングランドの貿易商人は、通常、ロンドンにおいて「貨幣獲得人」(taker) であり、アントワープにおいて「振り出し人」(deliverer) であった (Malynes, *Canker*, 1601, p. 39.)。

もし、アントワープでの決済資金が不足すれば、アントワープでロンドン宛てに手形を振り出すことで、フレミッシュ貨を調達していた。この借金は、ロンドンで再度アントワープ手形を振り出すことによって償う、という形で追加信用を得ることができたのである。しかし、このような金融操作は、コストが高くつき、資金繰りがこのために行き詰まることもしばしばあった (Tawney, *Introduction*, p. 76)。

1650年までには、為替手形が裏書きされて流通するようになったらしい。同じく、ド・ルーヴァーが紹介する手形を引用することにする。

In London, a dy le 16th January 1650

£50 Sterling att 37s. 6d.

Att two uso pay this first bill of exchange, my second not payed, to Mr. Japques Hoys or assigners fifty pounds sterling att hirty seaven shillings and six pence Flemish per pound sterling, the value of Mr. John Ffrederick and Thomas Rowse, and passe itt to Account peradvice.

Your lovinge ffreind

Jeronimo Mascall

To Mr. Richard Vale and Jacob Jacke
merchants in Antwerp

Accepted.....

Jacques Hoys

1650年1月16日, ロンドン

£50 st., 換算率 37s. 6d. fl.

この第1の為替手形は, ジャックズ・ホイズ氏, もしくは氏の指図人に £1 st. 当たり, 37s. 6d. fl. の比率で, £50 st. に相当する額を支払うことを示す。私の第2の手形では支払われない。これは, ジョン・フレデリック氏とトーマス・ロウズ氏から得た額と同じである。この額を指図された勘定につけること。

あなたの親愛なる友

ジェロニモ・マスカル

リチャード・ヴェイル氏とジェイコブ・ジャック氏に

アントワープ商人

引き受け人……

ジャック・ホイズ

この手形は, 「受け取り人」への支払いが約束されている。ここでは, ジャック・ホイズか, その委託人が「受け取り人」である。しかも, 「受け取り人」の裏書きがある。1611年の手形には, 「我々の勘定につけるように」という文言があったが, 今度の手形では, 「指図された勘定につけるように」という文言に替わっている。つまり, 手形の中ではどこの勘定につけるかといった指図はなく, 別途, 振り出し人が, 振り出先相手に指図書を出すという習慣が定着し始めたと考えられる (Holdsworth, *History of English Laws*, VIII, p. 153)。

VII ポンド建てであったことの意味

為替レートは, 正貨の鑄造費用で決まるものであることは当然のこととされている。平価からあまりにも長期間, 為替レートが乖離したままであると, 必ず正貨の流出が生じて, その乖離は解消に向かうものと信じられているからである。しかし, 16・17世紀の鑄貨は, 1国内ですら, 錯綜したものであり, 貿易決済にそのうち特定の鑄貨が使用されていたわけではなかった。しかも, 金貨にいたっては, 商人間では各国の通貨条例で決められているレートではなくて, 市場レートで流通していた。つまり, 鑄貨の内容が頻繁に変化していた

上ために、同じ額面価格の鋳貨でも、新しいものと、古いものとの間には内容的にかなり異なっていたのである。たとえば、エリザベス時代には鋳貨の内容を向上させたが、だからといって、内容的に劣る古い鋳貨が割り引かれて通用するのではなく、額面通りに、つまり、過高評価されたまま流通していた。これは、イングランドだけではなく、フランドル地方においても同様であった。

イングランドでは、1576年にスターリングとフレイミッシュ貨との正しい平価を算定するために、それぞれの鋳貨の内容を分析したことがある。しかし、その結果は、£1st. 当たり 24s. 7d. gr. から 28s. 2d. gr. までの幅ができてしまった。つまり、鋳貨の内容自体が一定していなかったのである (de Roover, *Gresham*, p. 130)。

16世紀のフランドル地方の通貨制度は、スティヴェル (stiver) を基礎としていた。その上に2種類のポンドがあった。120 スティヴェルのポンド・グロートと、20スティヴェルのポンド・アルトア (artoi) である。後者は、グルデン (gulden) とか、フローリン (florin) とも呼ばれていた。国際的に使用されたのは前者である。ポンド・グロートは、イングランドの呼称と同じく、シリング、ペンスに分割されていた。標準的な表記は、£, s., d., gr., であった。ただし、この分割は内容に沿ったものではなく、フレイミッシュ貨の小額貨幣は、スターリングに対して過高評価されていたし、高額貨幣は、逆に過小評価されていた。このような状況下では、そもそも正しい平価がなにかを確定することは、事実上不可能であったろう。

貨幣的混乱が常態である下では、銀行業は為替レートに利益を織り込まざるをえなくなる。事実、当時の為替レートは、金利を含んでいた。たとえば、ロンドンとアントワープの鋳造価格費用から見たときの平価が、£1st. = 22s. 4d. gr. であると仮定されれば、スターリング貨での貸し付けがロンドンで行なわれるかぎり、ロンドンで振り出されるスターリング建て1か月のユーザンス付きアントワープ宛て手形の価格は、フレイミッシュ貨で表現して、つねに平価よりも高くなければならなかった。そして、アントワープで振り出される手形

は平価よりも低いレートでなければならなかった。つまり、ロンドンにおける手形は、たとえば、22s. 6d. gr. であり、アントワープにおける手形は、22s. 2d. gr. でなければならなかった。この開きは、利子率に相当するものであった。この数値は、1564年の為替に関する王立委員会の報告に見られる。平価の22s. 4d. を上回る価格が利子率である、という点は、ウィルソンも証言している。銀行家がロンドンにおける資金提供によって利益を得るのは、

「ロンドンからアントワープ宛てに振り出された手形の方が、アントワープからロンドン宛てに振り出された手形よりも £1st. につき 3d. から 4d. ほど価格が高いことによる」(Wilson, *Discourse*, pp. 306f)。

ロンドンでスターリング貨を貸し付けるべく、ロンドン振り出し、アントワープ宛て手形を購入したロンドン在住の銀行家のアントワープにおける代理人は、1か月のユーザンスの後、契約通り、£1st. 当たり 22s. 5d. gr. のフレミッシュ貨を入手する。代理人はすぐさま、アントワープにおいてロンドン宛ての手形を購入する。ここでは、£1st. 当たり、22s. 2d. gr. であるので、この時点で銀行家は、£1st. 当たり 4d. gr. の利益が上がることになる。これは、銀行家の資金提供がアントワープで行われても同じ利益が得られる。アントワープでは、22s. 2d. gr. の資金で £1st. の手形が入手できる。ロンドンで得た £1st. で、今度は、アントワープ宛て手形を購入すれば、アントワープで 22s. 6d. gr. のフレミッシュ貨を得ることができ、同様に 4d. gr. の利益を得ることができる。アントワープ宛ての手形の方が、ロンドン宛て手形よりも高い価格を維持しているかぎり、資金提供が、ロンドンにおいてはスターリングで、アントワープにおいてはフレミッシュ貨幣で行ない、それぞれ、戻し為替を購入しておけば、最初に資金提供した地域でその地の通貨による利益を確保できるという理屈になる。つまり、ロンドンにおける資金需要が旺盛なときには、ロンドンとアントワープとの手形の価格差は大きくなり、ロンドンで振り出された手形の方が、フレミッシュ貨で表現されたとき、アントワープで振り出された手形よりも高いという条件は維持される。それは、ロンドンにおける事実

の利子率が高くなったことを意味する。ロンドンにおけるスターリング資金需要が小さくなれば、フレミッシュ貨で表現されたロンドンの手形価格は低くなり、事実上の利子率も低くなる。逆にアントワープでのフレミッシュ貨資金需要が旺盛になれば、フレミッシュ貨で表現されたロンドンにおける為替価格は低くなり、アントワープの資金需要が少なくなれば、ロンドンの為替価格は高くなる。この局面をマリーンズは、つぎのように表現している。

「海外で貨幣が豊富になれば、為替手形の価格は上昇し、海外で貨幣が不足すれば、為替の価格は下落する、というのが公理である。ところが、イングランド内部においては逆の事態が生じる。この地で貨幣が豊富になれば、為替の価格は下落し、貨幣が不足すれば、為替の価格は上昇するのである」(Malynes, *Canker*, p. 28)。

この文章は、言葉が足りないために分かりにくい。当時のイングランド商人にとって、為替手形の価格とは、スターリング建て為替手形のフレミッシュ貨で表現される価格のことであった。「海外で貨幣が豊富になる」ということは、イングランド人がアントワープで保有するフレミッシュ貨のバランスが増え、スターリング貨への転換需要が増えることである。このとき、スターリング建て、ロンドン向け、アントワープ振り出し手形のフレミッシュ貨表現価格は上昇することになる。ロンドンでスターリング貨のバランスが増え、フレミッシュ貨への転換需要が増えれば、スターリング建て、アントワープ向け、ロンドン振り出し手形のフレミッシュ貨表現価格は低下する。マリーンズは、そのように説明したかったのである。この価格形成なら合理的なものだが、実際には、そのようになっていない。ロンドン振り出し手形のフレミッシュ貨表現価格は、つねに、平価を下回っている上に、アントワープでの価格は、さらに、ロンドンでの価格よりも、低く位置づけられている。イングランド商人が、他ならぬスターリング貨を大陸の銀行家から借り入れようとするからであるし、イングランド商人のその種の借り入れ需要が減退すれば、大陸の銀行家はスターリング手形の買い取り業務を停止してしまうのである。つまり、スターリング建て

手形を、ロンドンとアントワープの両方の金融市場で売買し、ロンドンではスターリング貨、アントワープではフレミッシュ貨による貸し付け業務を利益の主要源泉とするかぎり、イングランド商人は、つねに不利な金融的取引を余儀なくさせられる。手形の建て値、売買のあり方そのものに、通貨当局は介入する必要がある。マリーンズの主張は、この点に集約されるのである。

実際、廃止される必要はないが、規制されるべきであるとの認識のもとに、為替調査委員会が過去幾度となく開設されていた¹²⁾。「王立為替委員会」(the Royal Commission) がそれである。この委員会は、1564年、1576年、1586年、1600年、1621年と開かれ、その都度、報告書が作成された。1564年の報告書は、為替手形が利子を隠していることと、為替手形の価格が交易条件を左右するという認識が出されていて、イングランドにおける不利な交易条件の救済策が模索されている。イングランドの為替が平価よりも低いために、イングランド製品の輸出価格が低く、外国品の輸入価格が高くなるという交易条件の不利さを是正するためには、輸出を伸ばして輸入を削減すること、フランスの正貨(French crown) に対してのみ、イングランドの正貨を渡し、イングランドの正貨が低地諸邦で流通するように努力すること、為替手形価格を維持するための平衡勘定を設定する、イングランドの毛織物市場をもっと東方に開拓すること、関税を改革すること、等の提言をした後、報告書は、為替の詳しい専門家による研究の必要性を政府に訴えている。この提案には、委員でなかったトーマス・グresham (Thomas Gresham) の意見が濃厚に反映されているとド・ルーヴァーは言う (de Roover, Gresham, p. 192)。しかし、景気の回復が早期であったこともあって、この委員会の提案が採用されることはなかった。

12) ただし、外国の商人、銀行家へのイングランド人の反感は、イングランド経済への政府介入を容易にさせる土壌を形成した。ヘンリーVII世は数々の制限を外国商人に課したが、それでも効果はほとんどなかった。政府が有力な商人に相談することもなく、採用した政策も正貨輸出の禁止といった古臭いものだった。1487年にはドライ為替への禁止措置が打ち出され、1531年には為替と戻し為替が国王の許可制になった。1551年にはすべての為替手形が禁止された。しかし、いずれも、ロンドンの商人自体がこの措置に音を上げて、即刻廃止されたという経緯を経る。為替手形なしには一切の貿易が遂行できないというロンドンの商人の訴えが効を奏したのである (de Roover, Gresham, pp. 182-83)。

1576年の委員会提案は、前回のものよりも、さらに激しく外国銀行の悪意を攻撃した。そこで、私的な銀行に対して為替業務を禁止し、かつての勅許為替業者 (Royal Exchanger) を復活させて、為替業務に課税するべきであるという提案が出された。このときの委員会にはグレンシャムが参加していた。1586年の不況のときの委員会でも、外国銀行家の陰謀によって、正貨流出と貿易阻害とが引き起こされているとの立場は、依然として貫かれていた¹³⁾。

つぎの1600年の委員会の中心メンバーが造幣局長官のリチャード・マーチン (Richard Martin) と並んでマリーンズだった。この委員会は、イングランドからの正貨流出の理由を以下の4つの点に求めた。鑄造価格が市場の金銀比価を正確に反映していないこと、為替が外国銀行家によって恣意的に操作されていること、外国商品の過高評価、輸入代替が進行していないこと、等々である (Beer, *Early British Economics*, p. 137)。中でもマリーンズは、報告書とは別に自己の意見書を提出し、平価近くに為替手形価格を維持することを最優先に考えていた (Beer, *ibid.*, pp. 137ff)。しかし、マリーンズのこの提案は政府によって無視され、スターリング銀1トロイ・ポンド当たり、これまでの£2. 18s. 2d. st. から、£3st. に鑄造価格が引き上げられて、ますます、為替手形価格は下がることになり、それに合わせて、鑄貨の価値が次第に引き下げられて行った。そのことが物価を上昇させて、国内景気を高揚させるという議論が大勢を占めていたのである。1621年の委員会でも、鑄造価格の引き上げが提

13) もちろん、ロンドン・アントワープ間の為替関係が逆転して、アントワープ手形の方が价格的に高くなってしまえば、アントワープの銀行家は損失を受ける。しかし、当時のロンドン金融市場は、アントワープの衛星地域であり、ユーザンスも1か月と短く、商業取引も頻繁であったために、貸し付け者のアントワープ銀行家の意向に沿う形で (事実上の利子率に連動して)、両地域の為替はかなり平行的な動きを見せていた。加えて、ポンド・スターリングの価値が、大陸の貨幣に比べて安定していたことも、為替関係を逆転させなかった重大な要因であった。

基礎になっている貨幣の母国の為替手形の方が、建て値されている国の手形の価格よりもつねに高かったというのが、当時の一般的な姿であった。ヴェネチアとアントワープとの為替の基礎はヴェネチアン・ダカット (Venetian ducat) であり、パリ・アントワープ間ではフランスのエキュ (écu) が基礎になっていて、それぞれ、ヴェネチア、パリの為替手形の価格の方が、アントワープ手形の価格よりも高かったのである。この関係は、18世紀まで続いたものと想定されている (de Roover, *Gresham*, p. 149)。

案された。ミッセルデンなどは、明確にこの路線を支持していた (Misselden, *Free Trade*, p. 106)。当然、マリーンズはこの路線に反対していたが、彼の提案はつねに拒絶された。当時の商人たちは、铸貨価値の下落の方を有利と考えていたからである (de Roover, *Gresham*, pp. 199-200)。

為替委員会はイングランドの景気後退の度に開催されたが、景気が回復すると、委員会の提案のことごとくが無視されるというパターンを繰り返していた。景気後退があるごとに、外国銀行の悪意が問題にされていたということは、外国銀行がスケープ・ゴートになっていたということであろう。1564年の不況は短かったが厳しかった。エリザベスの改铸によって、铸貨価値が上がり、国内にデフレーションが進行し、低地諸邦との通商関係の一時的な途絶があったからである。1576年にはスペインによるアントワープにおける虐殺 (the Spanish Fury) 事件でイングランドの冒険商人たちは、12,000クラウンの損害を被ったと言われている。つぎの1586年の不況も厳しかった。1621年の不況は過去最大のもので、これは、ドイツ三十年戦争 (1618年) のあおりを受けて、ドイツ市場への基地であるハンブルクでのイングランドの毛織物がまったく売れなかった (Misselden, *Circle of Commerce*, pp. 110, 114)。さらに、1621年の低地諸邦の宗教紛争、1624年のイングランドとスペインとの衝突などによって、不況は長引いた。

もともと、イングランド経済は、毛織物という単一の輸出品をドイツと低地諸邦の2つの市場のみに限定されていたという弱点をもっていた。この弱点を克服するために設立されたイギリス東インド会社もほとんど市場開拓の実績を上げることができないでいたのである。

お わ り に

その状況下で、せめて金融的従属から脱却しようとする方策を発見しようとしていたマリーンズの考え方は、グreshamとともに、自国権力を動員して国内・国外の金融市場を支配する営為を具体化することだったのである。ただし、

マリーーンズを含めた16世紀のイングランドの重商主義者たちは、為替の価格差が銀行家の利益の源泉であり、為替が平価から乖離しているか否かは、銀行家の利益にとってはなんの意味をももたないことに気づいていても、外国の銀行家たちが平価を下回る低い為替価格を意図的に演出するところから、正貨がイングランドより流出するとの考え (de Roover, *Gresham*, p. 146) を捨て切れなかった。外国鑄貨の国内流通禁止こそが、スターリング為替の平価割れを生み出す元凶であったことへの認識もあったが、ミッセルデンとの論争に見られるように、低為替による国内貨幣量増加をテコとした国内景気浮揚効果を狙う考え方の集団との角逐が、為替の平価維持という政策を不発に終わらせた。イングランド経済の従属性が貨幣改革の最大の障害となっていたのである。

引用文献

- [1] Antwerp, Belgium, Municipal Archives. Insolvente Boedelskamer : Nos. 446, 790. Bills of Exchange.
- [2] Beawes, Wyndham, *Lex Mercatoria Rediviva or the Merchant's Directory*, 3d ed., London, 1771.
- [3] Beer, M., *Early British Economics from the XIIIth to the Middle of the XVIIIth Century*, London: George Allen and Unwin, 1938.
- [4] Bloch, M., *Esquisse d'une histoire monétaire de l'Europe*, Cahiers des Annales, 9, Paris: Lib. Armand Colin, 1934.
- [5] Brenner, Y. S., "The Inflation of Prices in England, 1552-1650", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 15.
- [6] British Museum, Cotton MS Otho. E.10.; Additional MS 10038.
- [7] Buckley, H., "Sir Thomas Gresham and the Foreign Exchanges", *Economic Journal*, Vol. 34, 1924.
- [8] *Calender of State Papers*, 1641-1643.
- [9] Cipolla, C. M., *Honey, Prices and Civilization in the Hediterranean World: Fifth to Seventeenth Century*, New York: Gordian Press, 1967.
- [10] Coats, A. W., "In Defense of Heckscher and the Idea of Mercantilism", *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 5, 1957.
- [11] Coleman, D. C., "Eli Heckscher and the Idea of Mercantilism", *Scandi-*

navian Economic History Review, Vol. 5, 1957.

- [12] de Roover, R., *Gresham on Foreign Exchange*, Cambridge, 1949.
- [13] de Roover, R., *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges*, Cambridge, Mass.: The Mediaeval Academy of America, 1948.
- [14] D'Ewes, S., *The Journals of All the Parliaments During the Reign of Queen Elizabeth*, London, 1682.
- [15] Dietz, F., *English Public Finance, 1558-1641*, New York, 1932.
- [16] *Encyclopaedia of the Social Sciences*, III, "Burlamachi, Philip", New York, 1935.
- [17] Feavearyear, A. E., *The Pound Sterling; A History of English Money*, Oxford: Clarendon Press, 1931.; 邦訳, 一ノ瀬 篤・川合 研・中島 将隆訳, 『ポンド・スターリング…イギリス貨幣史』, 新評論, 1982年。
- [18] Geoges, Sir Arthur, *A True Transcript and Publication of His Majesties Letters Patent for an Office to be Erected*, London, 1611.
- [19] Gould, J. D., "The Trade Crisis of the Early 1620's and English Thought", *Journal of Economic History*, Vol. 15, 1955.
- [20] Gould, J. D., "The Date of England's Treasure by Foreign Trade", *Journal of Economic History*, Vol. 15, 1955.
- [21] Hinton, R. W. K., "The Mercantile System in the Time of Thomas Mun", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 7, 1955.
- [22] Holdsworth, W. S., *A History of English Law*, vol. V, London: Methuen and Co., 1924, Vol. VIII, London, n. d.
- [23] Judges, A. V., "Philip Burlamachi: a Financier of the Thirty Years' War", *Economica*, VI, 1926, pp. 285-300.
- [24] Johnson, E. A., "Gerard de Malynes and the Theory of the Foreign Exchanges", *American Economic Review*, Vol. 13, 1933.
- [25] Johnson, E. A., *Predecessors of Adam Smith*, New York, 1937.
- [26] Kirk, R. E. G. and Kirk, E. F., *Returns of Aliens Dwelling in the City and Suburbs of London*, vol. 2, Aberdeen, 1900-08.
- [27] Letwin, W., *The Origins of Scientific Economics*, London, 1963.
- [28] Malynes, Gerrard de, *Saint George for England: Allegorically Described*, 1601.
- [29] Malynes, Gerrard de, *The Canker of England's Commonwealth*, 1601.
- [30] Malynes, Gerrard de, *Englands' View, in the Unmasking of Two Paradoxes*, 1603.

- [31] Malyned, Gerrard de, *The Maintenance of Free Trade*, 1622.
- [32] Malynes, Gerrard de, *The Center of the Circle of Commerce*, 1623.
- [33] Malynes, Gerrard de, *Lex Mercatoria*, 1st ed., 1622.
- [34] Malynes, Gerrard de, *manuscript*, "Treatise of Tripartite Exchange", 1610.
- [35] Malynes, Gerrard de, *manuscript*, "A Treatise of the Royal Merchant of Great Britain", 1610.
- [36] Malynes, Gerrard de, "Treatise of Tripartite Exchange", British Museum, Harl. MS 513.
- [37] McCulloch, J. R., *Old and Scarce Tracts on Money*, London, 1856.
- [38] Milles, Thomas, *The Customers Replie*, London, 1604.
- [39] Mints, L. W., *A History of Banking Theory in Great Britain and the United States*, Chicago: University of Chicago Press, 1945.
- [40] Misselden, Edward, *Free Trade, or the Meanes to Make Trade Flourish*, London, 1622.
- [41] Misselden, Edward, *The Circle of Commerce or the Ballance of Trade*, London, 1623.
- [42] Muchmore, L., "Gerrard de Malynes and Mercantile Economics", *History of Political Economy*, Vol. 1, No. 2, Fall 1969.
- [43] Reich, Henry, *Rymer's Foedera*, Vol. 18, 1627.
- [44] Richards, R. D., *The Early History of Banking in England*, London: P. S. King and Son, Ltd., 1929.
- [45] Roberts, Lewes, *The Merchant's Mappe of Commerce*, London, 1638.
- [46] Royal Commission on Historical Manuscript, *Calendar of the Manuscripts of the Most Hon. Marquis of Salisbury*, Part 4, London, 1892.
- [47] *Salisbury Manuscripts*, London, 6, 1895.; 8, 1899.
- [48] Salzman, L. F., *English Trade in the Middle Ages*, Oxford: Clarendon Press, 1931.
- [49] Shaw, W. A., *The History of Currency, 1252 to 1894*, London, 1896.
- [50] *State Papers Domestic*, Eliz. I.; Charles I.
- [51] Stone, L., *An Elizabethan: Sir Horatio Palavicino*, Oxford, 1956.
- [52] Supple, B. E., "Currency and Commerce in the Early Seventeenth Century", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 10, 1957.
- [53] Supple, B. E., "Thomas Mun and the Commercial Crisis, 1623", *Bulletin of the Institute of Historical Research*, Vol. 27, 1954.
- [54] Supple, B. E., "An Elizabethan: Sir Horatio Palavicino", *Explorations in*